

中世都市堺と宗祇・肖柏

中庄新川家文書研究会報告三

山小鶴

村高崎

規道裕

子子雄



# 堺伝受の一流流 — 連歌師宗祇の場合 —

鶴崎裕雄

\*キーワード

中世都市堺・遣明貿易・相国寺・宗祇誕生地・古今伝受(堺伝受)

宗祇四十余年の 連歌師宗祇に関する論著に付された年譜には、例えば  
知音 石井宗友 島津忠夫氏の『連歌師宗祇』の寛正元年(長祿四年改  
元、一四六〇)の項に、

この頃より、堺の宗友と交友

とあり、奥田勲氏の『宗祇』の同年の項にも、

この頃、堺の宗友と交渉始まる

とある。新しくは両角倉一氏の『連歌師宗祇の伝記的研究』の所収の同  
年の項に、

この頃、和泉堺の石井宗友(前名与四郎、後に行本法師)と知り合う

(宗友句集『下葉』奥書)。

とあって、応仁の乱勃発以前、宗祇がまだ東常祿より古今伝受を与えら  
れる前、四〇歳の頃、堺の宗友と知り合っていた。

宗友については、角川書店の『俳文学大辞典』に、

連歌作者。生没不詳。明応九(二五〇〇)・七・八以前没(『下葉』)。

本名、石井与四郎。行本法師。堺の町人。寛正元年(一四六〇)ごろか

ら宗祇と交友があり、『新撰菟玖波集』に「読人不知衆」として七句入  
集。句集に『下葉』がある。文明一六〜一八年(一四八四〜八六)、

宗祇から古今伝授を受け、『古訓和歌集聞書』(書陵部蔵)を遺す。同

一八年二月六日住吉白州亭(何人百韻)、長享元年(一四八七)一〇月

九日〜一日『葉守千句』、延徳二年(一四九〇)九月二〇日『山何百

韻』に宗祇と同座。「島津忠夫」

とある。宗友についての詳しい論考の一つに、金子金治郎氏の『新撰菟  
玖波集の研究』がある。金子氏は、ただ一つの伝本である大阪天満宮所

蔵、滋岡文庫本の宗友句集『下葉』の奥書に注目する。

以中瀬常住所持本写之。文化十一歳季春 長松

とあり、巻首に、

下葉 行本法師

わきて春とや風よはきかた

朝またきひとむら霞む山見えて

以下、付句二四三句(四季並)、発句二〇句が続く。この発句の後に、

此一冊者行本法師俗名平及元新撰所作之連歌也、予四十余年知音、於此

道數寄無比類、仍為門弟、其志不淺、彼年來之句中抄之号下葉、愚

老之詠草有之号兩帖題老葉下草、因之得此名云忝

明応九年七月八日

釈宗祇在判

という宗祇の奥書があり、宗友は宗祇にとつて四十余年來の知音であり、連歌の門人であることが判る。新撰菟玖波集作者部類の流布本には「泉州堺住」、天理図書館建武式目合冊本には「与四郎地下者。泉州堺住」とある。さらに金子氏は、宗祇らと一座した、

○文明十八年二月六日於白洲亭何人百韻天満宮。発句「よるは月さぞ住の江の夕霞 宗祇」。連衆は、浄誉・氏昭・宗昭・頼重・宗友・則道・宗作・良珠ら。「下葉」には、右の発句の詞書を「住吉參籠の時春月」とする。

○長享元年十月九日葉守千句。第一発句「我もとてちるか葉守の神無月 宗祇」。連衆には肖柏・宗般・泰謙・宗友・宗長・惠俊・玄清・宗恕・眼阿・重阿・宗悦ら。

○延徳二年九月二十日山何百韻天満宮。発句「ふきもこぬ風の秋しる木葉哉 宗祇」。連衆には秀順・肖柏・長澄・宗友・宗般・日順・国家・宗益・良珠・玄清ら。脇の秀順は天王寺の僧、権大僧都。

の連歌作品を挙げ、宗友の死没については、『下葉』の発句の最後、

風をゝきて朝露涼し木々の庭

右発句終焉之前日之作なり

という左注から、右の宗祇の奥書の明応九年七月八日以前に没したと判

断する。

このように宗友は宗祇の古くからの弟子で、宗祇は明応九（一五〇〇）七月八日、越後下向を前にして、亡き宗友の句集『下葉』に奥書を記し、四〇年に及ぶ交遊を偲んだのである。

宗祇が何時、どのようにして宗友と巡り会ったのか不明であるが、私は宗友が堺に関わる人物、堺の出身とか、堺の商人とか、いずれにしろ堺に関わる人物であることに注目したい。堺は都と紀州・四国地方、いわゆる南海道を結ぶ港町として発達した。

ここでもう一つ、堺の連歌について、先覚の研究、木藤才藏氏の『連歌史論考』注下、第一章二から大要を引用したい。

摂津と和泉の堺に位置する商港堺は、大小路をさかいとして南北二荘にわかれ、南荘は和泉国に、北荘は摂津国に属していた。『蔭涼軒日録』、長享二年十二月三日の条に、南荘について、「彼在所無二地田一、以二屋地子一、為二土貢一、家数一乱以来倍二上古一、然者土貢亦可レ培二上古一分宜也」とあり、南荘はこの頃急速に繁栄して人家が密集した。当時の堺の市街の規模は、天文元年十二月十四日に、堺の南北両荘が焼亡した時の『二水記』や『嚴助往年記』の記事から、南北両荘には少なくとも六、七千軒以上の家屋があり、人口も三、四万以上であった。室町中期、一休宗純の許に参禅して大徳寺の再建に力を尽くす堺衆が多く、琉球や明国に渡航し「希代之徳人也」と記された湯川宣阿をはじめ、貿易で巨富を得た商人たちがいた。肖柏も、門弟たちに支えられて晩年を堺で送った。堺の連歌の流

行は室町後期に始まる。『新撰菟玖波集』には、「泉州堺者」宗友の句を七句も載せるし、宗祇もたびたびこの地に下向して作品を残している。宗祇が堺で詠んだことの明らかな発句を句集別に示すと、第二自撰句集『老葉』（文明十七年八月以前の成立）に、秋一句・冬一句、第三自撰句集『下草』（初編本明応二年成立）に、夏一句・冬一句、自撰発句集『宇良葉』（明応八年頃成立）に、春二句・夏一句・秋一句等で、総計八句に及ぶ。兼載の『園塵』第一にも堺での冬の発句が一句あり、少なくとも文明十年以後、堺には有名連歌師をしばしば迎えていたことがわかる。

長い引用になったが、私の若い頃、装幀が破れるまで読んだ金子氏・木藤氏の論考である。

**中世都市** 右のように宗友が堺に関わる人物であることに注目したい。**堺の魅力** 古代以来、堺は都と紀州・四国地方、いわゆる南海道をつなぐ港町として発達した。特に中世都市堺の発展は、応永八年（一四〇二）を初度とする遣明貿易の影響が大きい。以後、一九回に及ぶ遣明貿易が行われ、第三回の遣明船以後は割り印を証明とする勘合貿易が行われた。これについては前号の『調査研究報告』37号<sup>注7</sup>にも触れたのでご覧頂きたい。これらの貿易は幕府、特に管領細川氏と、博多を支配する守護大名大内氏によって運営された。<sup>注8</sup>ところが応仁元年（一四六七）、応仁の乱が勃発すると、大内氏と対立する細川氏の勘合貿易船は瀬戸内海の通航が難しくなり、堺を出港して大阪湾から土佐沖に出て、直接東シナ海を横

断し、中国に向かうルートを取った。結果、堺は勘合貿易の利益を独占することとなった。このことも前号の『調査研究報告』37号の拙稿で触れたところである。富を得た堺には各地から人々が集まった。

宗祇が堺の宗友と知り合ったのも、寛正元年（一四六〇）の頃、第一回目の勘合貿易船が帰国した享徳三年（一四五四）の後のことである。初めて会ったのは、堺が京都か、何処か判らないが、宗友が堺の人ということは、宗祇にとって魅力あったことと思われる。

時代は下るが、永正年間（一五〇四～二二）の頃、堺と撰津の池田の二か所に居住した招月庵正広の歌集『松下集』の日次の歌会を比較すると、池田では国人領主池田氏一族の歌会ばかりであるが、堺では歌会に集まる人々は、和泉守護細川頼久であり、日蓮宗成就寺院主であり、宗椿といった堺衆の商人たちである。歌会の会場も、池田のように国人領主の館だけではなく、守護の館や各派の寺院、堺衆の屋敷が提供されている（このことについても前号の『調査研究報告』37号の拙稿に記した）。つまり堺は、当時の守護や国人領主たちの領地とは趣を異とする自由な雰囲気が増った都市（もし都市という言葉に抵抗を感じる人は集落とでも呼ぶと良い）であった。

地方を旅する宗祇や宗長・宗碩たち、連歌師たちはこのような自由な雰囲気が漲った都市（集落を好んだ。例えば宗長は駿河と京都を往復する時、伊勢の大湊にたびたび立ち寄っている。<sup>注9</sup>）

宗祇の、極初期の弟子宗友が、こうした連歌師たちにとって魅力的な都市と深く関わった人物であることに注意しておきたい。

「乞食僧」とい。宗祇の出生について、明白な答えを引き出すことは困難  
われた宗祇である。宗祇の出生地については、これまでも近江国  
説と紀伊国説とが両立していた。

近江国説は、相国寺鹿苑院主景徐周麟の『翰林胡蘆集』<sup>注10</sup>第一一卷中、

宗祇老布衲、身産<sup>二</sup>江東地<sup>一</sup>、名喧<sup>三</sup>天子寰<sup>一</sup>

の讚に依るとされる。伊地知鐵男氏『宗祇』<sup>注11</sup>に、

恐らくこの讚は「実隆公記」永正四年五月十三日宗碩を介して宜竹和  
尚に依頼し、六月十五日出来した讚であらうと思はれる。

とある。宜竹和尚は景徐周麟の号、三条西実隆も連歌師宗碩も生前の宗  
祇と直接交誼のあった人物なので、「最も資料的には信憑され得るもの  
ある」という。私もこの説には賛成である。問題は「江東」の何処か、滋賀  
県琵琶湖東部の、草津市から守山市、さらに北へ、近江八幡市や東近江  
市、彦根市あたりまでの何処かを視野に入れて、もっと絞り込めないか  
が重要である。

紀伊国説は、これも伊地知氏の『宗祇』より引用すると、

彼の生国については、古来近江説と紀伊説の両説があつて、<sup>注12</sup>遽にそ  
の可否は決定しがたい。そしてこの両説は徳川初期を境にして二分  
され、室町期に流布通用してゐた近江出生説は、徳川期に及んで突  
然、影をひそめ、替つて紀伊出生説が唱へられはじめた。その後次  
第に紀伊説が定説化されるに随つて、種々な粉色や偶像化が添加さ  
れるやうになつた。

とある。なお脇田晴子氏は『天皇と中世文化』<sup>注12</sup>の中で、

宗祇は猿樂法師の子と伝えられるが、出自は明らかではなく、本人  
も言及しなかつたようである。『雅久宿禰記』には「乞食僧」と書かれ  
ており四十歳ぐらいまでの伝記は不明である。

と記す。これは歴代、朝廷の記録を保管する官務職の壬生雅久の日記『雅  
久宿禰記』（宮内庁書陵部蔵）の記事（『大日本史料』延徳二年一月四日  
条）に、

文庫破損、上葺無正鉢者也、仍種玉庵宗祇為合力料足千疋送進之、  
家君御祝着至極也、誠以不思寄芳恩也、……此乞食僧致此沙汰之条、  
希代事也、

とあるのによると思われる。このように宗祇は官務文庫修理のために千  
疋を贈った。伊地知鐵男氏は、江戸時代になると宗祇の紀州出生説が盛  
んになり、出生も低い身分とする説が多くなつたとするが、「乞食僧」と  
いったことが宗祇と同時代の日記に記されていることに注目したい。<sup>注13</sup>

宗祇の紀伊国の誕生伝承地は和歌山県有田郡有田川町下津野（藤波莊  
黍野）にあつて、「宗祇屋敷跡」の石碑が建ち、和歌山県の史跡に指定され  
ている。<sup>注14</sup>この有田川町下津野は平成一八年（二〇〇六年）に町村合併が行  
われる以前は吉備町と呼ばれ、昭和年代後期に盛んになった同和教育の  
推進地区で、宗祇の誕生も同和教育に取り入れられることもあつた。<sup>注15</sup>

しかし、私は紀伊説には賛成はしない。前述のように近江説に賛成で  
ある。本稿では誕生地について論ずるのではなく、若年の宗祇は深く相  
国寺に関係していたことを述べたい。

相国寺の 文明二二年(二四八〇)宗祇は大内政弘の誘いを受けて周防僧宗祇 国山口に下向し、同年九月から一〇月にかけて太宰府・博多・宗像など北九州一帯を旅し、『筑紫道記』<sup>注16</sup>の紀行を著した。紀行の初日、九月六日、宗祇一行は船木(山口県宇部市船木)に泊まった。

あるは山深く水流れ、あるは引板引き鳴らす賤の山田に、雁のうち鳴きなどする所々を過ぎて、船木といふ所に、昔、都相国寺にして折々頼み侍る人、此の山里を占めて吉祥院とて有り。今兩夜の契、万年の昔の語らいにも劣らず、様々の心ざし、狭き袖には包みがたくなん。

此の船木と言へるは、神功皇后御船を作り給ひけむ所となん。又「秋は過ぐれどこがれざる覽」と言へる船木の山の紅葉は此の頃にや。発句沙汰すべき由待れば、

吹きしぐる稲葉の雲の山おろし

旧友の好しみは中々にて、唯所の様を思ひ寄れり。

暁天に皆人別れ惜しみ立ち出づ。

宗祇の他の文中には全くという程、幼少期のことは書かれていない。そうした中で、『筑紫道記』のこの一文は若き宗祇を知る上で貴重である。この船木の吉祥院の院主は幼少期、宗祇とともに相国寺で過ごした人物である。

私は宗祇が幼少期、相国寺の稚児であったと想像する。中世の児童は寺院に上がって奉仕し、学問教養を積んだ。それも寺院の荘園の縁を辿って寺院に入る例が多い。宗祇もその例と想像する。『翰林胡蘆集』の景徐

周麟が「身産江東地」というので、琵琶湖東岸の相国寺の荘園を探してみた。相国寺の荘園はまだ整理されて研究されていないという。しかし荘園はともかくとして相国寺の僧侶には琵琶湖東岸の地に故郷を持つ者がいた。その一人、桃源瑞仙は近江国市村(滋賀県愛知郡愛荘町)が故郷で、応仁元年(一四六七)八月、応仁の乱の戦乱を避け、友人の横川景三を誘って市村に帰った。その途中、賊船が横行する琵琶湖を渡ることなど横川の詩文『小補東遊集』に記されている。九月、『翰林胡蘆集』に宗祇讚を残した景徐周麟も乱を避けて市村に來た。その数日前、相国寺ほか京都の多くの寺院が戦火に見舞われた。<sup>注17</sup>市村が相国寺と如何に関連したか、特に荘園と関わりがあったか不明であるが。当時、中世の稚児たちは出身地の寺院に入り、撰ばれた者は京都の本山に入った。宗祇も桃源瑞仙と同様に相国寺に関係のある(特に荘園関係の)土地の出身かと想像する。<sup>注18</sup>これはあくまでも想像であって、実証されるものではないが、私は当たらずとも遠からずと思っている。なにしろ、宗祇は幼少期には相国寺で学び、連歌専門の道を選んだのである。ここで私は宗祇が相国寺と深く関係していたことを強調したい。

金子金治郎氏も『宗祇の生活と作品』<sup>注19</sup>(金子金治郎連歌考叢中に、宗祇の生涯にとつての相国寺は、きわめて重要であって、宗祇の生活の節目や側面が、相国寺生活によって解明されるといったことも、存するように思われる。

と記す。金子氏は、宗祇の第二の句集『老葉』の初編本に、

吉祥院渡唐の帰朝に、聖廟法楽千句沙汰ありしとき、所望発句に

はござきのあけほのいかにゆきの松

とあるのに注目する。この発句はやはり宗祇の発句集『宇良葉』の詞書きに、「西国よりしる人千句すべきよしありて、所望侍し時」とある。

遣明貿易は幕府と大内氏によって行われ、幕府の五山統轄機関であった相国寺の僧たちが遣明貿易の運営や通訳に関与した。相国寺の僧であった吉祥院は大内氏の許で遣明貿易に携わり、貿易船に乗船した。その帰朝を祝って連歌の守護神天満天神の聖廟法楽千句の発句の一つを宗祇に依頼したのである。『老葉』の初編本は文明一三年（一四八二）頃の成立である。このことから金子氏は吉祥院が乗船したのは、文明八年（一四七六）出航、文明一〇年帰朝の第二三次遣明貿易と推測する（勘合貿易としては第一二次、遣明船回数は『国史大辞典』5 遣明船一覽による。）

この推測は正しいと思う。宗祇の『筑紫道記』の二年前のことである。船木の吉祥寺には小野美典氏の「『筑紫道記』の長門国船木「吉祥院」について」、及びそれ以前の発表に「瑞松庵蔵『福聚山吉祥寺縁起』『番匠観音縁起』『観世音略縁起』の翻刻と紹介」「筑紫道記」長門国船木記事の吉祥院」の論考があつて、現地に不案内の者には、吉祥院について詳しい具体的な知識が与えられるのはありがたい。<sup>注21</sup>

このように遣明貿易と吉祥院院主からも宗祇と中世都市堺との繋がりを窺うことができる。

堺における『鉦訓和詞集聞書』<sup>こせんわかしゅうききき</sup>（ここで宗祇の初期の弟子宗友に戻る。宮内庁書陵部蔵『鉦訓和詞集聞書』<sup>こせんわかしゅうききき</sup>）については武井和人氏を代表とす

る鉦訓和詞集聞書研究会による翻刻があつて手軽に見ることができ<sup>注22</sup>。

その解題「『鉦訓和詞集聞書』をめぐる」の中で、武井氏は、両角倉一氏<sup>注23</sup>と島津忠夫氏<sup>注24</sup>の指摘から、文明一六年（一四八四）二月六日・一〇日・一日、『鉦訓和詞集聞書』の講義は宗友が上落して宗祇の種玉庵で行われ、二月一日には宗祇が下向して堺で行われ、さらに翌年、文明一七年四月一日から五月二〇日まで堺で行われたとする。これは両角・島津両氏により、『鉦訓和詞集聞書』には講義の日次がメモのように書き込まれ、一方、宗祇の行動は、その頃三条西実隆邸で源氏講釈が平行して行われ、宗祇不在の時は肖柏が代講していた日次と合わすことによって明らかに<sup>注25</sup>なった。

宗祇が実隆や近衛尚通たちに古今伝受を始める前、宗友や肖柏に講義している。宗祇の古今伝受は宗友が最初のものである。それが中世都市堺であつたことに大きな興味を覚える。

後に肖柏が堺に居住するのは永正一五年（一五一八）以降であり、『鉦訓和詞集聞書』の講義より七〇年後のことである。その頃、肖柏は堺に居住するとは思ひも寄らなかつたであろう。堺では武士も僧侶も堺衆の商人も肖柏の許に集まり歌会や連歌会が行われ、当然、『古今和歌集』や『源氏物語』の講義も行われ、選ばれた者には古今伝受が施された。いわゆる堺伝受である。私は堺伝受の一つの源流を、内容は別として、中世都市堺の活動的な新奇で自由な気風に存在したと思うのである。

現在進行している国文学研究資料館の調査、特に新川家文書の調査から堺伝受について、新発見<sup>注25</sup>があり、更に研究が進むことと期待する。



## 注

- 1 島津忠夫『連歌師宗祇』岩波書店 平 3、島津忠夫著作集 四『心敬と宗祇』和泉書院 平 16。
- 2 奥田勲『宗祇』吉川弘文館(人物叢書) 平 10。
- 3 両角倉一『連歌師宗祇の伝記的研究』勉誠出版 平 29。なお両角氏には『宗祇年譜稿』山梨県立女子短期大学紀要 15 昭 57・3、『宗祇連歌の研究』勉誠社 昭 60 にも詳細な宗祇年譜がある。
- 4 角川書店『俳文学大辞典』平 7。
- 5 金子金治郎『新撰菟玖波集の研究』風間書房 昭 44。
- 6 木藤才蔵『連歌史論考』明治書院 昭 48、増補改訂版 平 5。
- 7 鶴崎裕雄「中世堺と堺古今伝受の土壌」『調査研究報告』37 国文学研究資料館 平 29・3。
- 8 遣明貿易・勘合貿易については、小葉田淳『中世日支通交貿易史の研究』刀江書院 昭 17、木宮泰彦『日華文化交流史』日本歴史新書 至文堂 昭 36 ほか。
- 9 鶴崎裕雄「伊勢山田における連歌師宗長——一つの地方文化史論——」島津忠夫古稀記念『日本文学史論』世界思想社 平 9。
- 10 『翰林胡蘆集』第一一卷 種玉宗祇菴主肖像賛 五山文学全集第四卷(復刻版) 昭 48。
- 11 伊地知鐵男『宗祇』青梧堂 昭 18、後、伊地知鐵男著作集 I(宗祇)汲古書院 平 8 に再収。
- 12 脇田晴子『天皇と中世文化』吉川弘文館 平 15。
- 13 連歌師の「乞食僧」「乞食の客」について、岩坪健「三条西家源氏物語の影響——『細流抄』の享受——」『親和国文』32 平 9・12、田村航「宗祇の古典研究——二条・冷泉両派からの学の継承と展開——」学習院大学文学部研究 究年報 48 平 13。
- なお田村航氏は、宗祇の「低い身分出生」については「湯川彦衛門覚書・『塵塚物語』を挙げるが、「卑賤な出自とする同時史料はなくこれは後世になってから流布した可能性が高い。……実際のところははっきりしない。「乞食僧」や「身のいやしき」が出自を指したものでどうかは判断保留するしかない」とする。私(鶴崎)も判断を保留しつつ、引き続き近江国東部の相国寺莊園辺りに宗祇の出身地を求めたい。
- さらに宗長の著といわれる『連歌比況集』(小学館新編日本古典文学全集 85『連歌論集・能楽論集・俳論集』)に「乞食の袋」の項目がある。
- 14 地元、旧吉備町の宗祇誕生について書かれた著書に鈴木弘宣『宗祇法師』有田教育会 昭 9、近藤信慶『宗祇』藤並公民館編 昭 26 がある。また私(鶴崎)も『和歌山県史』中世 和歌山県 平 6 で戦国時代の文化を分担し、県下の宗祇の伝承地について執筆した。
- 15 吉備町は、部落問題の完全解決の夜明けを目指す運動(ダウン計画)が行われ、「戦後和歌山県での部落解放運動がいち早く始まった地域」で、「同和教育は吉備町に学べ」とまでいわれた。『和歌山の部落史』通史編 和歌山部落史編纂会 平 27 ほか、『吉備町宗祇法師五百年祭記念誌——今に生きる宗祇——』宗祇法師五百年祭実行委員会(吉備

町) 平 14。

16 新古典文学大系 51 『中世日記紀行集』岩波書店 平 2。

17 鶴崎裕雄分担執筆『日野町の歴史』第二章 日野の中世社会と文化 第四節 日野の中世文学 日野町史編さん委員会 平 21。

18 鶴崎裕雄「宗祇出生地小論—寺院領・莊園との地縁的關係に求めて—」関西大学『国文学』96 平 24・3、相国寺の莊園として野洲郡玉造莊(野洲市野洲)・蒲生郡綺田莊かばた(東近江市綺田町)がある。

19 金子金治郎『宗祇の生活と作品』(金子金治郎連歌考叢Ⅱ)桜楓社 昭 58。なお本稿は「第二章 相国寺と堺・住吉(五八頁〜八六頁)から教えられることが多かった。

20 遣明貿易の次数については、鶴崎裕雄「中世堺と堺古今伝受の土壌」(注 7)にも一覽表を掲載した。

21 小野美典「瑞松庵蔵『福聚山吉祥寺縁起』『番匠観音縁起』『観世音略縁起』の翻刻と紹介—『筑紫道記』長門国船木記事の吉祥院—」『語文』123 日本大学国文学会 平 17・12。

22 鈷訓和語集聞書研究会『鈷訓和語集聞書』笠間書院 平 20。  
23 両角倉一『宗祇連歌の研究』(注 3)。

24 島津忠夫『連歌師宗祇』、島津忠夫著作集 四『心敬と宗祇』(注 1)  
25 例えば小高道子「解題と翻刻—中庄新川家蔵 古今和歌集聞書(仮題)—」『調査研究報告』37 国文学研究資料館 平 29・3、「堺伝受における『古今和歌集』講釈—中庄新川家蔵 古今和歌集聞書(仮題)をめぐって—」『中京大学文学会論叢』3 (『中京国文学』通号 36)

平 29・3、「和歌両神と古今伝受—和歌両神への奉納和歌—」『文化学研究』28 平 29・3、大和直美「翻刻と解題—慶長三年二月「連歌・和歌会書留」・慶長五年「陪八月十五夜月宴歌合和歌」—」『調査研究報告』37 国文学研究資料館 平 29・3。

本稿には小高道子氏・湯川敏治氏・柴田真一氏より貴重な資料提供やご教示を頂戴した。お礼申し上げます。